
千雨の夢

メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千雨の夢

【Nコード】

N0988BA

【作者名】

メル

【あらすじ】

果たして夢を見ているのか、今までが夢だったのか・・・

千雨魔改造ものです

活動報告に更新予告書いています

夢の始まり

「長谷川さん。 長谷川さん！」

この良く出来た夢は、一見なんてことはない、良く晴れた春の教室の一室から唐突に始まった。

「・・・んあ？」

名前を呼ばれて顔を上げれば、教壇の上から女の先生が教科書と教鞭を持ってこちらを見つめていた。

ジャージ姿で教鞭を持つその姿を見て、小学校かよ、と思わなくもないが、変人揃いのこの麻帆良だ。十分許容範囲どころか、ど真ん中ストライクだろう。

それに実に動きやすそうだ。おそらくもう少し反応が遅れば私の机の元へ向かってきただろうことは容易に想像できた。

「長谷川さん！ 先生がいま何て言ったか聞いていましたか？」

いけない、ボーっとしすぎたか。周りを見なくてもクラスメイトの視線が突き刺さっているのが感じられた。やばい、赤面ものだ。

いや、この程度このクラスじゃどうってことないのはわかってるけど、私には私のアイデンティティってのがある。

急いで何か返答しないと、えーっと、そもそも今は何の授業だったか・・・？

机の上の教科書が開いているページは、つと・・・

「もう、やっぱり聞いてなかったのね。もう一度聞きます、” なのだん” は覚えてきましたか？」

「・・・は？」

開けっ放しの窓から入ってきた風が、机の上の教科書を数ページ戻らせる。

そこには ” はじめての九九 ” と書いてあった。

「・・・は？」

それは、一見とても甘く優しい夢。そう、夢を見ているのか、夢から覚めてるのかも分からなくなるくらい、甘い甘い蜜のような夢だった・・・。

千雨の夢 はじまります。

ってモノローグっぽいこと言ってる場合じゃねえ！ 七の段！？

七の段って九九のあれだよな！？

なんだ、とうとう小学2年生からやり直しになったのか！？ 1年生からじゃかわいそうだから1年オマケしてやるよってか！？ うれしくねーよ！！

バカレンジャーだけつつこんどけばいいじゃねーか！

いや、それよりとりあえず七の段だ、落ち着け、確かに七の段は九九の中では鬼門だ、私的には最大の難関だった。つつーか語呂合わせ的なあれで答えりゃいいのか？

しちいちがしちしちにじゅうし、って言っていけばいいのか！？

「長谷川さん、ほら、しちいちが・・・」

しってるわボケー！！ わざわざ隣から教えなくてもいいって！
誰だ、綾瀬か！？

「高町さん、教えちゃダメですよ？ ちゃんと自分で覚えないと意味が無いんです。」

高町さん！？ 高町ってだれだよ！？ てか良く見たらガキしかいねー！？ さすがに龍宮は無理があつたか！？ 鳴滝姉妹がその辺にまざってねーか！？

ってか私だって無理があるわ！！

いや、待て、七の段だ、落ち着け、とりあえず七の段だ。こういうときはあれだ、まず慌てず騒がず七の段で立ち上がって、しれっと七の段を答えて座っちまえばいいんだ。

よし、まず椅子を引いて、立ち上がって、七のって何だこの視界？
妙に低くねーか？

まるで身長が30センチくらい縮まったみてーな、って・・・

身長が 本当に 縮んでやがる

やばい どーなってるんだ これ？

「は、長谷川さん！？」

私は、意識を手放した。

「うわあああああああ！？」

掛け布団を蹴り飛ばし、勢い良く起き上がる。心拍数は最高記録を絶賛更新中で、息は喉が裂けるのではと思うくらい荒く、全身汗でびっしょりと濡れて。

1分か、2分だろうか、兎に角起きたまま固まっていたが、すこし落ち着いたところで辺りを見回す。

まず目に入るのはいつも寝ている自室のベット。次にコスプレ衣装が入っているクローゼット。そしてデスクの上に置いてあるパソコン、カメラ、部屋の隅に固められた撮影機材。

そこは既に1年以上を過ごした寮の一室だった。

「良かった・・・！ 夢落ちでホントに良かったあ・・・！！」

やっぱりあれか、最近流れてる学年最下位だと小学生からやり直して噂、あれのせいかな！

いくら麻帆良でもそこまでしねーだろ、とは思っていたけど、心のどこかではあれを信じてたのか。で、夢に出たと。

くそ、ここにいろかぎり安眠もできねーのかよ・・・！！

「ちっ・・・はあ。・・・シャワーあびよ」

・・・まあ、それもいまさらか。登校の準備しねーとな。
今日も最低の一日になりそうだ。

「あー、ねみい……。」

昼休み。ふつーに一人で飯を食って、休み時間はまだあと30分くらいある。

睡眠時間はいつもと同じくらいだけど、あの夢のせいか眠くて眠くて仕方ない。

「おや、いつにも増して眠そうですね、長谷川さん。」

「ん……綾瀬か。」

伸びをしたり目の周りを揉んだり、なんとか眠気を撃退しようと格闘してたところ、隣の席の綾瀬が話しかけてきた。

こいつは2Aの中でもまだ話せるほうだ。とは言っても比較的、という程度でしかないが。

「今日は夢見が最悪でな、ぜんぜん寝れた気がしねーんだ。」

まあでも友人の範囲に片足の先が入り込む程度には喋る仲でもある。ほかの連中が濃すぎるだけに、綾瀬も一歩引いた位置によくいるためだ。

「午後一番は新田先生の授業です。ある意味眠気が覚めるかもですが、何なら授業前に起こすので一眠りしてはどうですか？」

新田か……。新田の前で眠そうにしてたら朗読や感想なんかをわ

わざわざ当てて来そうだな。
ここは綾瀬にあまえるか。

「あー、悪い。それなら寝させてもらうかな。」

「ええ、眠気覚ましの飲料も用意しておくですよ。」

「いや、それは・・・いい・・・」

こいつの飲み物は・・・変なの・・・ばかりだから・・・な・・・

「おや。本当にすぐ寝たです。そんなに夢見が悪かったですか。」

「ゆえー。炭酸コーヒーのトマト味しかなかったよー?」

「いえ、あるいみお誂え向きです。どうですか、のどかも?」

「わ、わたしはオレンジジュースでいいやー。」

「・・・ん? 布団?」

・・・あれ、なんで私横になって寝てんだ? 机で寝てたような。
それにここは・・・保健室?

「あー、長谷川さん! 起きたの? 大丈夫?」
「ん・・・えつと、高町さん?」

またこの夢か！

明晰夢？

つまりこれはあれか？ 明晰夢ってやつか？

夢の中で夢だと自覚できてるんだし。あれって行動も好きに出来る場合もあるらしいが・・・

「もー！ 急に倒れるから心配したんだよ！？」

「いや、ごめんね高町さん。」

どうやら今回は見てるだけらしい。こうなると普通の夢と何も変わらないよな。

起きた時に無駄にドキドキしたりビクリすることが無いくらいか。恐らくこれはさっきの夢の続きで、倒れた私は保健室で寝かされたんだろう。

で、隣の席の高町って子がこうして着いてくれているってところか。付き添ってきたのか、授業が終わってから様子を見に着たのか、かな。

「高町さんはどうしてここにいるの？」

お、私ナイス。まさしく聞きたいことを。

「えっと、長谷川さん起きた時に一人じゃ寂しいかなっておもって

」

てへっなんて感じで首を傾げながら笑いかけてきやがった・・・！ガキだけど、優しくていい子なんだろうな。そして天然だ、間違いない。

「そ、そう……。でも、いいよ。私に付きまとわないで。」

優しくていい子なら、2Aのやつらも大概そうだ。けど、あいつらと私じゃ絶対に合わない。

友達以上の付き合いなんてできっこない。だから、きつとこの子も・

バンッ！！

「ちよつと長谷川！！　せつくなのはが心配してるのに、なによその言い方！！！」

と、突然大きな音を立てて保健室の扉を開き、金髪の少女が怒鳴り込んだ。

いいんちよタイプか、基本は抑えてるんだなこの夢は。

高町、なのは？　が、保健委員か？　だとすると次に出るのは風紀委員か。

「アリサちゃん、怒鳴っちゃだめだよ！」

あー、図書委員か。はずした。

「でもだつてすずか、なのはが昼休みずつとここにいるのに、あの言い方は無いじゃない!？」

「にははは、私は別に気にしてないんだけど……。でも、同じクラス友達だもん、ちよつとくらい一緒にいてもいいよね？」

「友達なんて、いらない。」

このアリサって子が言ってるのはまったくの正論だ。あーあ、夢の中でまで私の環境は変わらないのか。

どれだけ仲良く友達付き合いしようとしたって、所詮私が私に嘘をついて、上辺だけの綱渡りのような友情しか生めやしない。それならいつそ友達なんていらないさ。その方が楽だ。

「友達が要らない？ 何でそう思うの？」

図書委員が・・・じゃない、すずかだったか、が理由を聞いてきた。その後ろではアリサが高町に取り押さえられている。ますますいいんちよだな、アリサ。

「だって、みんな私のこと嘘つきって言うから。」

それについてはもう諦めた。人が車より早く走ろうが、1000mを超える木が普通にはえてようが、ロボットが歩き回ってようが。だれも気に留めないどころか、当然だと思ってやがる。

そんな中一人で騒ぐのには、もう、疲れた。

あーあ、夢の中で、ガキ相手に何いつてるんだろうな、私。

「あんたの何が嘘つきだっていうのよ！ ためしに何か言ってみなさいよ！」

ためしに、ねえ・・・。じゃあー

「1000mを超える木が観光名所になってない」

「えっ？ えっと、世界中から観光客が来ると思うけど・・・」

ん・・・？

「恐竜ロボットが走り回ってた」

「はあ？ 立ち止まって手と首と顔を動かすくらいがせいぜいでし

よ？」

あ、あれ・・・？

「車より早く走る人がいたんだけど・・・」

「にやはは、さ、さすがにそれは嘘って言われると思うなあ・・・」

あ、そうか、これは夢だから・・・

「あんた、わざと変なこと言っただけ私たちを巻こうとしてない？」

「・・・うん、変なこと、だよ」

「ちょ、ちよつと長谷川さん！？　なんで泣いてるの！？」

ここは麻帆良じゃないんだ・・・。ひょつとして、これは私が望んだこと、なのか。

「高町さん。」

「え、な、なに！？」

「ごめんね、失礼なことって。」

「・・・！　ううん、あ、名前で呼んでくれたら許してあげる！」

「まったく、いつものが始まったわ」「なのはちゃんらしいね」

「・・・なのは？」

「うん！　千雨ちゃん！」

この夢の中でなら、私は自由に友達を作れるのかもしれない。
所詮夢だけど、そんな気がした。

キーンコーンカーンコーン・・・

「あ、お昼休み終わっちゃう！」

「長谷川、あんたはお母さんが迎えに来るらしいからまだ寝てなさい！」

「じゃあまた明日ね、千雨ちゃん！」

私は涙を流しながら、手を振って3人を見送った。

その後、母親が迎えに来て、一緒に手をつないで家へと帰った。

「倒れたらしいけどずいぶん嬉しそうね、千雨？」

「うん、友達ができたの！」

「そっか、良かったわね。」

夢の中の母親とこんな会話を交わしつつ。

「つか、そろそろ醒めるべきじゃね？」

夢Ⅱ理想？

「長谷川さん。長谷川さん！」

「・・・んあ？」

結局。あの夢は家に帰って食事して、風呂に入って歯磨いて自分の部屋でゲームして、ベットに入って暫くたって終了した。恐らく寝たんだろう。

やはり夢だからかダイジェスト風に流れていくので時間の経過は大して気にならなかったけど、ほとんど1日の経過を夢に見るのも珍しいもんだ。

いや、授業の途中からだから3/4くらいか。どうでもいいな。

で、夢が終わったと同時に綾瀬に起こされた、と。ずいぶん切りが
いい夢だ。

「はい、約束どおり眠気覚ましの飲料です。どうぞ。」

「た、炭酸コーヒートマト味・・・だと・・・っ!？」

顔を上げて隣を見ると、そこには綾瀬と宮崎がいた。それはいい、こいつらと早乙女はセットみたいなもんだ。

それに綾瀬に授業前に起こしてもらったような頼んでたしな、何の疑問もない。

炭酸コーヒー？ まだアリだ。馬鹿なもん作ってんじゃねーよってメーカーに文句いって、乗せられて買ってんじゃねーよって購入者に文句いった後なら、一口ぐらい飲んだっていい。いや、味次第では2-3口飲んでもいいさ。
だがトマト、テメーはダメだ。

「おや、まさか飲めない？ これはわざわざのどかが校外の自販機

へ行つて買つてきてくれたものなのですが。」

「ゆ、ゆえー。あれはついであつただけだから・・・」

くつ、なんだ、私が悪い流れなのか？ でもこのチョイスは無いだろ！？

ああ、くそっ！ こうなりやヤケだ！

「わかつたよ、飲めばいいんだろ！ よこせ！」

綾瀬から缶を引つたくり、キャップ式の口を回し開け、口元へと運ぶ。

そして一口目を口に流し込んだ時、まず最初に広がるのは炭酸の刺激。

それとともにコーヒーの風味が口いっぱいに広がって、

（あ、案外ありかも？）

と不覚にも一瞬思つちまつた。

しかしいざ飲み込もうとしたとたんに襲ってきた、猛烈なトマト。

そしてそれがコーヒーと混ざり合い、臭覚を乗っ取ってしまう。

さらに炭酸に乗り刺激となつて口の中を蹂躪し、若干温いから爽やかさの欠片もないわけで・・・

「・・・不味い」

一口飲んだだけでギブアップだ。これは飲めたもんじゃない。

「ふふふ、この味が分からないとはまだまだですね、長谷川さん。」

ふと綾瀬の机を見ると、そこには空になった炭酸コーヒートマト味。ほんと、こいつは飲み物に関しては群を抜く変人だ。味覚全般かもしれないけど。

その証拠に、

「飲むか？ 宮崎。」

「（ふるふるふる）」

ほら、宮崎だって若干青ざめながら首を振ってやがる。

「むう・・・二人ともまだまだです。」

キンコンカンコン・・・

「あ、それじゃ私はもどるねー。」

授業開始のチャイムになる。新田は珍しく少し遅れるようだ。

いつもならチャイムと同時に教室へ入ってきて、まだ立ち歩いている生徒をみて小言を大声で言うくらいはするんだけどな。

あと認めたくないが、炭酸コーヒートマトのおかげで眠気は完全に吹き飛んじまった。

「そうそう、長谷川さん。夢見はどうでしたか？」

「あー、これのせいで台無しだ。」

そう言い、まだ手の中にあるコーヒをすこし掲げてみせる。

「ふふ、つまり夢自体は良かったですか。」

「ん？ ああ・・・」

夢自体は、か。まあ、たしかに・・・

「悪くは、無かったぜ。」

結局、あのは（2 A基準では）とくに何事もなく、6時間目の授業も終わり私はまっすぐ寮の自室に帰ってきた。
なんとなく捨てずに持ってきてしまった炭酸コーヒートマトを見つめながら、パソコンをつけて今日あったことをつらつらと考える。

（友達、か・・・）

あの夢はきつと私の理想の小学校時代、なんだろう。
100mを超える木が日本にあるのは変だし、ロボット技術は人型ロボットが駆け足する程度で大ニユースだ。
車より早く走れる人がいっぱいいて、学生なんてしているわけがない。
けどここではそれが当たり前。変なのは、いつだって私だった。

（そこまで精神的に弱くはない、と思ってたんだけどな）

今日の綾瀬との会話みたいに、何の気概もなくバカなことをいつでも言い合える・・・

そんな友達がほしかった、んだろうか。

あの夢は2回連続で見た。しかも夢にありがちな、2〜3分も経てば忘れるような夢じゃなく。

まるで実際に経験したかのように鮮明に覚えている。
じゃあ、ひよっとして。

もう一度寝たら、あの夢の続きが、見れるんじゃない・・・

「・・・はあ、バカらしい。」

そんなわけではない、単なる偶然だ。きつともう一度寝たら、全然関係ない夢を見るか、夢なんて見ずに時間が過ぎれば起きるんだろう。そう、馬鹿馬鹿しいことを考えてないで、趣味のコスプレか掲示板への返信でもしねーと。

（ナイーブ、ってやつか？ それともセンチメンタル？）

気分転換でもするか。とりあえずこのコーヒーは冷蔵庫にでも仕舞っておこう。冷やせば少しは飲めるもんになるだろ。

そう思い、パソコンで自分のホームページを開きつつ、コーヒーを冷蔵庫へ持っていく。

中にはペットボトルに入った水しか入っていない、自炊してなければこんなもんだ。

コーヒーを仕舞ったあと、ホームページの掲示板を見るが、こんなときに限って新しい投稿は無い。

コーヒーについて書き連ねておけばそのうち誰か返信してくるだろう、とは思うが・・・

（・・・ちよつとだけ、寝るか？）

馬鹿馬鹿しい、そう思いながら。

いや、夢を見たいんじゃない、ちよつと食事時まで軽く寝たいだけだ。

今朝はよく寝れなかったし・・・
と、だれに宛てるでもない言い訳を考えつつ、ベットの中へと入っていた。

続く夢

「千雨ー！ おきなさーい！」

・・・普通に見れたよ、続き。

あれか、前回は寝て終わったから、今回は起きたところからってことか？

それでたぶん寝ると夢から醒めるんだろ？

「千雨ー！ まだ寝てるのー！？」

「いま行くー！」

しかも今回は行動まで自由に出来る明晰夢、と。まるで胡蝶の夢だな。

つと、とりあえずパジャマから着替えるか。このパジャマもガキの頃着てたのと一緒にだな。

別に感慨深くもなんとも無いが、すっかり覚えてる自分にちょっと苦笑してしまう。

これを着てたころはまだ自分の言うことを聞いてもらおうと一生懸命で、周りから変な目で見られてたっけ。

この夢は家そのものは実家と一緒に、ただ通ってる小学校が違う設定らしい。

海鳴市という街に住み、私立聖祥大附属小学校の2年生。

麻帆良のまの字も周りには無く、非常識の気配もどこにも無い。

あ、いや、昨日のアリサとすずかはお嬢様らしいが、まあその程度だ。

こんな設定もすらすらと思い出せるのは、夢ならではのご都合主義というやつか。

「朝ごはんさめるわよー！」
「はい！」

おっと、こっちの母親が呼んでる、怒り出さないうちにさっさと着替えて食べるとするか。
夢の中で食事するのも妙な気分だぜ・・・。

「いつてきまーす！」
「いつてらっしゃーい」

朝飯を食べたあと、いつものように、というのも変な気分だけど、まあいつものようにバス停まで歩いて向かう。

上級生か下級生か知らないが、バス停には既に数人の小学生が並んでいたが、特に挨拶することも無く列の後ろへと続く。

バスを待つ間、小学2年生ってどんな授業やってたかを思い出してみけど、さっぱり思い出せない。

どうやら算数は九九をやっているところみたいだけど・・・まあ、どうにでもなるだろ。

伊達に中学2年生をやっているわけじゃない。

お、ひょっとしてこれって強くてニューゲームってやつか？

全学生の憧れだな、うん。

なんてことを考えているうちにバスが到着し、適当に空いてる場所へ座ろうとしたときに――

「千雨ちゃん！ こっちこっちー！！」

バスの一番後ろ、5人掛けの席を占領してる昨日の3人組の一人、なのはが大声で呼んできた。

「恥ずかしいからそんな大声で呼ぶな！」
「にははは、ごめんごめん。」

そう文句を言いつつ3人組の元へ向かう。なのはは大きく、すずかは小さく手を振り、アリサは腕を組んで不敵な笑みを浮かべていた。こんな小さなことでもそれぞれ性格の違いが出るもんだ。
そしてアリサ、お前はどこの王女様だ。

「あれ？ あんたこの時間のバスに乗ってたんだ。」

「おう、こういう後ろの席は不良の指定席だから、目合わせないようにしてた。」

「だ、だれが不良よ！」

「クラスメイトが心配で保健室と教室を行ったり来たりするいい子だもんな。誤解してた、すまん。」

「・・・っ！」

おーおーアリサのやつ顔真っ赤。ちよつとしたジャブを打ってきたから、お返ししたただけなんだけどな。

その隣ではすずかが「長谷川さんの勝ち」なんか言ってるし。
そしてやっぱこいつ典型的なツンデレか。ツンデレお嬢様ってテンプレすぎじゃないか？

「まあ、これから宜しく頼むよ『アリサ』、『すずか』」

そう言つて二人に笑いかける。そうするとちよつと間が空いた後、

「当然じゃない、千雨」

「うん、千雨ちゃん」

「あ、ねえねえ私は！？ 千雨ちゃん！？ ねえ！？」

ああ、やっぱりいいな、こういつの。

そして昼休み。私たち4人は一緒に屋上で弁当を食べていた。

授業はやはりというか当然というか、なんの問題も無く終わるように思ったんだけど――

「ちょっとなによ千雨！ 因数分解が分かるってどういうこと！？」

そう、算数があまりにも暇なため、外をみてぼーっとしていたら、また教師に当てられた。

問題自体は1桁の掛け算なのでぱっと答えたのだが、その折教師からきちんと授業を聞けと小言をもらっちゃった。

そこで売り言葉に買い言葉というか、うん、たぶん浮かれていたんだろう。いつもの私なら適当に返事をして流すところなんだけど、つい……

「因数分解までなら分かるから大丈夫です。」

って、答えてしまい、そのまま教師のだす因数分解（中1レベル）をパパッと答えちゃった。

ぬああ、現実では常識外れの連中に嫌気がさしていたはずなのに、こっちで私が羽目をはずしてどうすんだ……！

しかも大丈夫って、なにが大丈夫なんだよ！ 痛い子じゃねーか……！

「千雨ちゃんって頭良かったんだね。塾とか行ってるの？」

「うがぁぁ・・・！　って、ん？　塾は行ってねーよ。」

「じゃあなんで因数分解なんて知ってるのよ？」

「あー、家庭教師？　みたいなもんだ。」

うん、嘘は言ってない？　微妙だな。

まさかこれは夢の中で、現実では中学2年生ですなんて言えるわけないし。

その後もずるいとか教えろとか言ってくるアリサを適当にあしらいつつ食事を続け、そろそろ昼休みも終わろうかというところ。

「ねえ、今日放課後千雨ちゃんの家遊びに行っていていい？」

と、なのはがこんなことを言い出した。

私の家に？　遊びに？　別に見られて困るものは（寮の自室と違って）何もないし、特別断る理由もない、か。

「いいけど、ゲームくらいしかないよ？　普通の家だし。」

「いいね、ゲームしたい！」

「勉強教えなさいよ！」

「私も行ってみたい！」

と満場一致で可決され、放課後私の家に案内することになった。

そして今度こそ何事もなく授業が終わり、放課後。

校門まで迎えにきたアリサの家の車で（リムジンだった）私の家ま

で案内し、部屋に上がらせた。

思えば何気に初じゃねーか？ 友達を部屋に上げるのって……。って、いかん、これは夢だ。なに普通にカウントしようとしてるんだ私は。

それに麻帆良の連中を部屋に上げることは絶対ない！

「あー！ このカメラ最新のやつだ！？ 千雨ちゃん撮っていい！？」

と、そんなことを思っていると意外にもなのはがカメラに興味を示した。

部屋の中のものはある程度向こうと同じものがあるらしい。カメラやパソコン、あと小物だな。

撮影機材とコスプレ衣装は無いが、これはきっと私が隠したいと思っているからなんだろう。

「ああ、適当に撮っていいぞ。メモリーもまだ空きがあるはずだし。」

「やったー！ ありがとう！」

それじゃ飲み物とってくるから、適当にしててくれー。

と、3人に声をかけて（聞いてるかどうかわからないが）、私は飲み物を取りに台所へと移動した。

何があるかなー、麦茶でいいかなー、と思いながら冷蔵庫を開けると、そこには

「こ、これは・・・！」

「またせたなー」

「あ、お、おか、おかえり!？」

「……ん？ どした？」

コップ4つに麦茶が入ったポット、あと黒い液体が入ったコップを1個お盆に載せて、私は部屋へと戻ってきた。

てつきりカメラで適当に部屋の中を取りまわってるか、ゲームか本棚でも漁つてるとばかり思っていたが、予想は外れ3人してカメラのディスプレイを覗き込んでいた。

お互いを写真に撮って写り具合を見てるのか？ とも思ったけど、それにしても慌てすぎだ。

一体何してるのかと思う私もカメラのディスプレイを見ようと覗き込むも――

「だめ!？」

隠されてしまった。

「おいおい、それは私のカメラだぜ？ 何撮ったんだ？」

「え、えーと、千雨ちゃん怒らない？」

「言ってみな。」

「あ、あのね、撮った写真を見ようとしたら、こんな写真が出てきて……」

そう言い、ディスプレイを私の方へ向けるのは。そこに写っていたものは……

「ぬあああああ!？ 見るな!!!」

モリ。ンのコスプレをした私（中学生ver）だった。

「ご、ごめんね！？ わざとじゃないんだよ！？」

「あははは！！ 似合ってるじゃない！ なんて隠すのよ！」

「うん、ホント可愛いよね。これって千雨ちゃんのお姉さん？」

お、おね？ そうか！ いま私は小学生だから・・・！

「そ、そう！ いや、従姉妹だ！ いやーうちに来てカメラで撮っていくんだよ！ あはは！」

ああ、くそ、恥ずかしいな！ なんでこんなのに限って一緒にくるんだよ！？

コスプレ衣装がなくて安心してたのに！ 油断もすきも無いな！

「ああくそ、アリサ！ 思いっきり笑いやがって！ お前はこれを飲め！」

「ん？ なにこれ、コーラ？」

そう言い、アリサには麦茶じゃなくて冷蔵庫に入っていた『アレ』を渡す。

ああ、コーラみたいなもんだ、そう言うときアリサは特に警戒もせず一口飲む。

そう、もちろんその正体は・・・！

「んぐ！？ ツカハ、ゴホッ、ま、不味い！？ なによこれ！？」

「ははは、炭酸コーヒートマト味だ。」

「どこから買ってきたのよこんなもん！？」

「ハハハ、写真の従姉妹が持ってきたけど不味くて飲めなかった。」

「そんなもん飲ませるんじゃないわよー！？」

「そ、そんなに不味いの？ 私も少し飲んでみたい・・・」
「や、やめておきなさい！？ なのは！？」

お、今度はアリサとなのはが漫才を始めたな。今のうちにカメラ隠すか・・・。

つと、さすがが寄ってきた？

「ねえ、千雨ちゃん、吸血鬼とか好きなの？」

「あ、あ？ いや、吸血鬼物か？ んー、結構好きだぜ？」

「ふーん、そつかあ・・・。」

一体なんだ？ ずずかのやつ、なんか変だったけど。

「あ、私も飲んでみたい！」

まずーい！ って言って麦茶を飲んでるのはから、コーヒーを受け取るずずか。

あ、案外飲めなくもないかも・・・？ なんていつて二人からすごい目でみられている。

「あはは、いいよな、やつぱ。」

うん、楽しいな、やつぱり。

「ちょっと千雨！ のこりはあんたが飲みなさいよ！」
「げ！？ ずずか、頼む！！」

その後もみんなで騒ぎ、ゲームし、パソコンの中にあった別のコスプレ写真も見つかってまた一騒ぎし、空が赤くなり始めたところで解散となった。

「お邪魔しましたー!」

「また明日ね、千雨ちゃん!」

「ばいばーい!」

「元気な子達だったわね!。昨日言っただお友達?」

「・・・、うん!」

P i P i P i P i . . . P i P i P i P i . . .

「ん・・・晩飯の時間か・・・」

その後、やはりというかなんと云うか、夜になりベットに入って、しばらくしたところで目がさめた。

部屋の中は薄暗く、廊下からはキヤーキヤーと騒ぎ声が聞こえるが、部屋の中からは物音一つせず。

部屋の扉が向こうの世界（非常識）とこっちの世界（常識）を隔てる境のようで。

いま見たものは所詮夢だ、夢ではあるんだけど・・・

「たのしかった、なあ・・・。」

そうつぶやくと、起き上がり、冷蔵庫から水を取り出し一口飲む。そして、「何も入っていない」冷蔵庫へ水を戻し、食堂へと向かっていった。

境界に立つとき

みんなーおハローp(・・)q 今日は大・大・大ニユースがあるんだよー！

なんと！ ちうはさつき解析夢を見ちゃいました！！

5番目の白鳥 > 夢のなかで夢とわかるやつですね？ 私も見てもいたいものです。

通りすがりB > ちうタンどんな夢みたの？(w

えーっとね、結構忘れちゃったんだけど(< >) i
友達と遊んでる夢だったの！ 楽しかったよ♪

学園長 > もしかして：明晰夢

アイスワールド > 俺も解析夢見てみたいな！ それでちうタンと(以下略

ちうファンHIRO > でも解析夢って危ないって聞いたことあるよーなー？

えー、ちう怖い(<|>) ただの夢じゃないの？

アイスワールド > ちうタンの夢を見れるなら本望！ むしろこ褒美！

5番目の白鳥 > 夢そのものじゃなく、それをどう捉えるかですよ。

通りすがりB > 二度寝して遅刻の危機だね(w

うーん、どう捉える？ 覚えてないもんよくわかんないや。
でも遅刻はとっても危険かもー！

5番目の白鳥 > 休めばいいのです。

アイスワールド > 俺も休んで夢を見続けるぜ！

学園長 > ず、ずるはいかん！

通りすがりB > しかたないね（w

ちうはちゃんと毎日学校に行ってるよ！

あゝ、でも来週から期末テストなんだよ！ 勉強しなきゃー！p（

< | > q

ちうファンHIRO > 实力を見るためのテストなんだから勉強

しなくていいよ！

アイスワールド > 俺も俺も。でも俺は夢でちうタンに教えても

らう！

というわけで今日はもう落ちるねゝ ばいばーい！

返事を待たずにチャットルームを閉じる。期末テストで最下位だったら小学生からやりなおし・・・

別にそのうわさを本気で信じているわけではないが、好き好んで悪い点数を取りたいわけでもない。

いつも通りテスト範囲の教科書問題を一通りやる程度で良いだろう。それでいつも平均点より少し下くらいの結果になる。まじめに勉強する気も無いしな。

なんか担任のガキが妙に張り切っていたのが気になるが。

そんなことを思いつつカバンから教科書とノートを取り出そうとし――

「ちつ、持ってくるの忘れたか。」

教室の机の中に入れっぱなしで、持って帰って来ていないことに気づく。

さて、そうすると一気に手持ち無沙汰になっちまった。

チャットでもするか？ でも既に勉強するといって落ちている手前、なかなか戻り辛いものがある。

じゃあコスプレ写真でも撮るか？ そう思いカメラを手にとるも、

『千雨ちゃん撮っていい！？』

『あはは！ 似合ってるじゃない！』

『可愛いよね〜』

家の部屋での光景が急に頭をよぎる。

結局あいつら何撮ったんだろうな？ と思い、カメラのメモリーを参照しようと電源をオンするが、どうやらバッテリー切れなのか画面は黒いままだ。

「ああ、電源いれたまま隠したしな。」

コスプレしていることをリアルの友人にふれて回るほどオープンじゃない。

あいつら3人は笑いはするだろうが（特にアリサ）、決して馬鹿にしたり受け入れなかったりすることは無いだろう。

そうは思うが、いまいち踏ん切りがつかないのがオタク心というものだ。

など考えつつ、メモリをカメラから外し、カメラを充電器にセットする。

すると充電中を示すオレンジのランプが光る、やはりバッテリー切れだったらしい。

それじゃあと、メモリをパソコンにセットしようとし・

「・・・まてまてまてまて!? なにナチュラルに確認しようとしてるんだ私は!?!」

ありや夢じゃねーか!! なんだよリアルの友人って!? これじや危ない奴じゃねーか!

メモリを開いたところであいつらの写真があるわけ無い! しっかりしろ私!?

「あー、もう! 寝る!」

すっかり何もする気も起きなくなった私は、まだいつも寝る時間からずるとかなり早いが寝ることにした。

やってらんねー、そういう思いと、また夢が見れるのかなという仄かな思いがあることは自覚している。

馬鹿馬鹿しい、夢に何期待してるんだ私は。

そう思いつつも、見れたらいいな、1日で終わるのは勿体無いなど、思いながら・・・。

翌朝。

「結局見れたよ。なんだ、いつまで続くんだ?」

小学2年生の夢はまた見る事が出来た。あいつらと一緒にバスで学校に行き、つまらない授業を聞き流し、一緒に弁当を食べ。

アリサに数学を教える代わりに英語を教えてもらうことを約束し。ネイティブな英語と教科書英語とはまた違うだろうが、あのガキなら意味さえ通じれば正解にするだろう。

そして午後の授業のあと、今日は塾があると言うアリサ達と別れ、途中までなのはと一緒に帰り。

家についたあとは家族としゃべり一緒に料理をして、作った料理をお父さんに褒められ幸せな気分のまま1日が終了した。

現実の小学生のときにはありえなかった1日だ。決して家族と仲が悪いわけじゃねーんだけど……。

「いつそあつちが現実ならいいのに。」

つい、そんなことを呟いた。なのは達の他にも教室にいるやつらと友達になり、週に何度も遊び、家では家族と和やかに過ごす。

すこし想像しただけでもそれはとても楽しい毎日になりそうだ。

「はぁ……。学校いい。」

そんな現実味のないことを言ってもしかたない。それこそ『夢』だつつの。

なんて考えなら、夢の中身を反芻しつつ登校の準備を始めるのだった。

「何ですって！？ 2Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビに」
「！！？」

教室に入ったとたん、いいんちよのそんな叫び声が聞こえてきた。
おう、そりゃいい。最下位といわず今すぐクビにしろ、大人になつてから出直せってんだ。

だいたい免許なんて持ってないだろ？ 後に生まれた「先生」なんて何の冗談だ。

そう思いながら自分の席につく。綾瀬がまだ来てないな、珍しい。いつも私より早く来てるのに。

つと、やっぱり机の中に教科書置いたままだったか。とりあえず全部出して、5教科だけ持って帰るか。

とりあえず整理して持って帰らないものをロッカーに移動するか・・。

と、そこで叫びながら廊下を走る音に気づく。どこの馬鹿だ？ と思いい廊下のほうを見ると・

「みんなー大変だよー！ ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に・・・！」

・・・なんだよ行方不明って？ 聞けば図書館島で遭難したらしい。知らんけど遭難するようなサイズの島かよ・・・！ 本当になんなんだここの奴らは！

おかしいだろ！？ だれか突っ込めよ！？ なんでそんな遭難する場所が街の中にあんだよ！？

それにテストが近いってのに先生までそろってみんなで探検かよ！？ 挙句遭難しましただあ！？ 授業どうするんだよ！！

「とにかくみなさん！ テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですわよ！ その辺のまじめにやってない方々も！」

「置き勉なんてしないでテスト勉強しないとネギ先生いなくなっちゃうよー！？」

イライラしながら教科書を整理していると、クラスのやつらが私達に・
・正確には、教科書を整理している『私を見て』そんなことを言
いやがった。

くそ、なんであのガキのために勉強しなきゃなんねーんだ！！

「・・・知ったこっちゃねーな。」

「は、長谷川さん？」

なんであんなガキのために勉強するのが当然みたいな空気なんだ！？
なんで探検なんてバカなことしてる奴らの尻拭いを私もするんだよ
！？

ああ、もうやだ、ついていけない。クラス解散でもネギ先生クビで
も好きにしゃがれ！

「いいんちょ。わりーけど早退する、宜しく言っといてくれ。」

「は、長谷川さん！？ 待って下さい！」

いいんちょが引き止めてくるけど知ったことが。

教科書を置いて、そのまま振り返らずに学校を出て、寮の自室へと
帰り。

私はベットに直行した。

千雨の選択

「ねえねえ、今夜お泊り会しない!？」

学校の屋上でいつものように弁当を食べているとき、突然なのはがこんなことを言い出した。

「あ、最近やってなかったよね!」

「いいけど、誰の家でやるのよ?」

明日から祝日で休みだし、千雨ちゃんとお泊り会してないしね!となのはが言う。

ちなみに私はまだ口の中からあげが残っているので喋れない。冷凍食品じゃない、実際にお母さんがつくったやつだ。

こう言うとは弁当のために朝から揚げ物をする気合の入った母親だと思いかもしれないけど、何のことはない、昨日の残りだ。形が悪いのは私が作った分だし。

その証拠にご飯は冷凍食品のピラフだ。今時のキャラ弁なんてもつての他。ま、弁当作ってくれるだけいいけど。

向こうの小学校は給食だし、中学校は金持って食堂だし、弁当食べるのは運動会か遠足くらいだったな。

「んー、私の家は今日お父さん達居ないからダメかな。」

「家はいいいけど、前も私の家だったわよ。」

そしてすずかの家はダメで、アリサの家は前もやったと。そうすると私の家かなのはの家になるんだけど――

「千雨ちゃんの家はだめ?」

「ん、私の家か？」

なのはが言うには私の家でやったゲームの続きがやりたいらしい。それじゃついでに英語教えるから数学教えなさいよ！ とアリサが言い、すずかも賛成に1票投じた。別にそう問題はない・・・よな？ 両親もいるし、部屋も片付いてるし。

あ、でも一応確認しておくか。

「ちょっと待つてな、いま確認してみる。」

そう言いつつ携帯電話を取り出し、母親にかける。あ、じゃあ私も今日泊まっていいか聞いてみるー！ と他の3人もそれぞれ電話しだした。

『もしもし、千雨？ どうしたの？』

「もしもし。あのさ、今日って家に友達泊めてもー」

『あらあらまあまあ！ 誰々？ この間の3人の子たち！？』

「あ、うん、そー」

『それじゃ晩御飯沢山用意するわね！ 期待して待つてなさい！ お母さん早速買い物にいつてくるわよー！』

「あ、ちよっー」

・・・切れた。これはオツケー、なんだよな？ 電話して正解だったんだよな？ 不安だ。

速攻で電話が終わったのはいいが、みんなはまだそれぞれ電話中だ。今のうちに弁当を片付けるか。

それにしてもお泊り会か。初めてだな。アメリカ被れなのか最近じゃパジャマパーティーなんて言い方も増えてきたみたいだけど、やっぱり基本は「お泊り会」だよな、ふふ。

「・・・千雨？ なにニヤニヤしてるのよ？」
「ばっ、ちよっ！？ な、なんでもない！ 家はオツケーだったぜ
！？」

・・・気づけば3人とも電話終わってこっちを見てやがった。くそ、
失敗したぜ。

そして放課後。今度はバスを使って4人で私の家に移動した。

「「「おじゃまします！」「」」
「ただいまー。」

そう声をかけて家に入ると、居間のほうから返事が聞こえて玄関へ
向かってきた。

もう買い物終わって居間にいたのか、お母さん。

なんかこつち来てるしちよつと待つか？ なんて思ってるうちに扉
が開き、お母さんが現れた。

「いらっしやい、みんな！ もーこの子ったら友達作るのが下手で
あなた達が初めてなのよ。みんな仲良くしてあげてねー？」

「ちよ、ちよつと！ いきなり何言い出してるんだよ！？」

「へー、私達が初めて？」

「私は千雨ちゃん大好きだよー！」

「はい、いつも仲良くしてもらっています。」

もー、余計なこと言わないで！ と未だに笑っているお母さんを居間に押し込み、私は先に部屋へと向かう。ああ、恥ずかしい・・・暑い、私いま顔赤くなってるないか？

「何々？ 千雨、照れてるの？」

「て、照れてねーよ！」

「あはは、千雨ちゃん顔真っ赤ー！」

もう！ 笑うなよ！ なんていつつ部屋に入り、さっそくなのはとずかにはゲームを開始する。そしてアリサには先に数学を教えるかと思い、机の中から中1の時のノートを引っ張り出した。

「うわー、あんた本当に本格的に勉強してるのね。なに書いてあるかさっぱりわかんないわ。」

「わかってたまるかよ。私だってそれなりに苦労して覚えたんだぞ？」

「それもそうよね。ここまでわかんないと返って清らしいわ。」

とはいっても、やっぱりいきなりこれじゃ教えれないか。でもさすがに小学校のノートはないし。

「しゃーない、前提からゆっくり教えるか。」

「ふふ、よろしく願います、千雨先生？」

「はいはい、お願いされたよ、アリサ」

その後、夜になりお母さんが作ったやけに豪勢な晩飯を食べ、皆で狭いお風呂に入ったりお喋りした後。

「ねえねえ、千雨ちゃん！ 記念写真とっていい？」

なのはが充電器に挿しっぱなしにしてあるカメラを見てこんなことを言い出した。

「あ、いいわね！ 撮ろう撮ろう！」

「さんせい！」

「記念写真ねー。いいけど、私が撮るのか？」

「ばか！ それじゃ千雨が写らないじゃない！ お母さんに頼めない？」

「お母さんねー。ちょっと待って、聞いてみる。」

そう言い、3人を残し居間へ行く。お母さんはサスペンス物のドラマを見ながら携帯機のゲームをしていた。別にいいけど、どっちかにしろよ・・・。
それはともかく。

「ねえお母さん。4人で写真を撮りたいからシャッター切ってもらっ
つ」

「まあまあもちろんいいわよ！ あ、化粧する？」

「し、しないよー！」

あはは、わかってるわよー、なんて言っ立ち上がり二人で部屋へと向かう。じゃあなぜ訊いた。

「それじゃあ撮るわよー！ みんな笑って笑ってー！」

「はい、千雨が真ん中ね！」

「私ちさめちゃんの隣ー！」

「ちょ、くつつきすぎ！」

「私千雨ちゃんの後ろね！」

「はい、チーズ！」

カシャッ

デジカメのくせに相変わらずそんな音を立てて、集合写真は撮り終わった。

「ねえねえ、プリンタがあるってことは印刷も出来るんでしょ？
やりなさいよ！」

「あ、私もほしいー！」

「ああ、分かってるって。いま印刷するからちよつと待つてな。」
「ありがとうー！」

その後、何か知らんがお母さんも欲しいと言ったので5枚印刷し。
それぞれに渡したあと、私の分は机の中にしまう。

お母さんは写真を渡すと部屋を後にし、3人は勝手に喋りだしたの
で、私はついでにインターネットブラウザを立ち上げた。

「この辺は向こうと変わらないよな。さすがに麻帆良や、ちうのホームページなんかは無いけどよ。」

そんな独り言をつぶやく。

暫くネットサーフィンを続けていると、気づけば3人組が静かになっている。

見るとアリサとすすかは既に眠り、なのはも漫画を読みながらうつうつとしている。

1分ほど見てても漫画のページが進まないことから、ひよっとしたら寝ているのかもしれない。

そんなに長い時間ネットしていたとは思わないけど、ガキは電池が切れるかのように突然寝るからな。

なんてちよつと失礼なことを思いつつ、私はネットを続ける。

最近思うのは、これが本当に夢なのか？ ということだ。

馬鹿馬鹿しい、夢に決まってるじゃないか。そう思っではいるが、一方で疑問に思う私もいる。

夢ならなぜ私の知らないことが出る？

（アリスの英語なんて知らないことばかりだ。）

——きつと知らないうちに聞いていて、それを覚えているんだろう。

（私はから揚げの材料の分量なんて知らない）

——テレビの料理番組でもやっていたんだろう。

（そもそも海鳴市や聖祥小学校ってなんだ？）

——夢に理屈を求めても仕方ない。

そう。夢に理屈を求めるなんてナンセンスだ。だけど――

「夢。なんだよ、なあ・・・？」

そう。寝ると見るんだから、夢しかないじゃないか――

「あれえ？ 千雨ちゃん、寝ないのー？」

「ん、なのは、起きてたのか。」

呼ばれて振り向くと、なのはが眠そうな顔でこちらを見ていた。てつきり寝てるとばかり思っていたが、辛うじて起きていたらしい。

「いや。最近どうも、夢見が悪くてな。」

「いやな夢見るの?」

そんなとこだ。そう言いつつパソコンを落とす。私も眠くなつて来た、そろそろ寝るか。

そう思い立ち上がると、なのはが近寄ってきて私の腕を取った。
ん? なんだ?

「じゃあ、一緒にねよ?」

一緒に寝ればいやな夢もみないよー。

そう満面の笑みで言われると、なかなか返答しにくいものがある。

あ、ああ。なんとか小声で返事をし、なのはに腕を引っ張られたままなのはの布団の中へと一緒に入る。

「それじゃ、おやすみいー。千雨ちゃん。」

おやすみ、なのは。そう言うと、私の腕を抱いたまま、あっさりと寝てしまった。

仕方ない、私も寝るか。起きたら何から始まるんだったかな。確か学校を早退して、昼くらいにはなってるか?

そんなことを考えているうちに、私の意識は闇へと落ちていった・・・。

「ん・・・、昼か・・・?」

目が覚める。きつと昼だ、飯食べて勉強でもするか？

なんて寝ぼけた頭で考えつつ起き上がろうと、腕を動かそうとし、

「・・・は？　なんで？」

右腕にはなのはが、左腕にはすずかが抱きついたまま寝ていて、そして正面にはアリサがニヤニヤしながら携帯を構えていた。

「あ、あれ・・・？」

大人達の事情

パチン パチン・・・

パチン パチン

麻帆良学園の一室、学園長室に囲碁の音が響く。

上座に座るのは正しく好々爺と呼ぶに相応しい、白く長い髭と後頭部を蓄えた老人。

下座に座るのは凡そ囲碁とは結びつかない、まるで西洋人形のような容姿をした金髪の少女。

そしてもう一人、少女の後ろには一見人間のようで、よく見るとアンテナや球体間接といった人間にはありえないパーツを持った女性が控えている。

テスト前だからだろうか、学園の中や外からいつも聞こえる生徒達の賑やかな笑い声は鳴りを潜め、先生が廊下を歩く音がやけに響いている。

パチン、と。

老人が一手を打つと同時に、少女に向けて言葉を放つ。

「今日、お主のクラスの長谷川君が早退したらしいの。」

ん？ そうなのか？ と、金髪の少女は後ろの女性に話しかける。

「はい。正確には8時25分46秒に教室を後にしています。授業が始まる前ですので早退ではなく欠席が相応しいかと。」

ふーん、と。少女は相槌をうち、次の一手を考え出す。

ただなんとなく確認してみただけで、特に意味は無いらしい。

右手に黒い碁石を持ち、少女にあるまじき椅子の上でスカートに胡

坐姿というあられもない格好で、左手で頬杖をついたまま盤上を見つめている。

「最近彼女の様子はどうじゃ？」

少女が碁石を置こうとしたとき。老人がそれを制するように話しかける。

少女は打つのをやめ、訝しげな表情を浮かべ老人を見た。

「やけに気にするじゃないか。何だ？ 何かあるのか？」

ふむ。そう返事とも取れない相槌を一つうつと、老人は碁盤の脇に置いてある湯飲みを取り、一口飲む。

それを見た少女も訝しげな表情のまま喉を濡らす。

その後、学園長室には一時の静寂が訪れた。

「・・・？」

そのまま黙ってしまった老人から視線を外し、少女は後ろの女性と目を合わす。

しかし後ろの女性も首を傾げるのみ。

仕方なく少女は碁の続きを打とうと、改めて盤上に手を伸ばす。

そして黒い碁石が盤上に置かれようかというとき、老人が口を開いた。

「彼女には、認識障害が効いておらん。」

パチン。

その音を立て、再度の静寂が訪れた。

「・・・それはさぞかし辛いだろうな。」

少女は苦虫を潰したような表情を浮かべ、老人を見る。その目には老人を責める色がありありと浮かんでいた。しかし老人は目を瞑ったまま、ピクリとも動かない。

「ここで認識障害を受けず、なおかつ関係者じゃないなど、悪夢のようなものだ。なるほど、あいつがいつも不機嫌なのはそのせいかな。」

会話のボールは老人に渡る。少女は老人を見つめたままその反応を見定めている。

三度の静寂が訪れたまま。少女がお茶を啜る音だけが部屋に響いた。

「・・・ふむ。そもそもそれに気づいたのは小学校低学年の頃じゃ。周りとの見識の違いに苦しんでおったの。」

パキッ

少女の持つ湯のみが悲鳴を上げた。

「それほど前から気づいているなら、なぜ手を打たん？ ジジイなら親の仕事に手を回して麻帆良から追い出すなりなんなり出来るだろうっ？」

部屋の気温が下がりだす。窓の内側には露が浮かび、老人の吐く息が白くなる。

少女の持つ湯飲みが砕けるが、中身が飛び散ることはなかった。

「この麻帆良から出しても同じじゃよ。認識障害が効かないなら、いつかどこかで巻き込まれる。ならば麻帆良の中におけるほうが良い

「思ったんじゃがの。」

「ハッ、ならば裏の関係者にすれば良い。あのクラスに入れてなし崩し的に関係者になることを期待したか？」

「ふむ。その意思が無いといえば嘘になるの。」

「はつきり言えばいい。知っててほうっておきました、お前のストレスの原因は自分達魔法使いですと。それが言えなくてあのクラスにしたんだろう？ 哀れだよ、長谷川が。」

部屋のなかが極寒へと変わる。少女の後ろに控えていた女性が窓を開けようとするも、凍り付いてしまい動かない。

「それを言われると辛いんじゃないが……。のうエヴァンジェリン、常識とはなんぞや？」

今にも立ち上がろうかとしていた少女の機先を制し、老人が話しかける。

勢いを殺がれた少女、エヴァンジェリンはイライラとした様子でそれに答えた。

「そんなもの人それぞれだ。」

老人は急須から改めて湯飲みに茶を注ぐとするも、いくら傾けようと茶は出てこない。

むう……。と、一つ唸り、諦めてエヴァンジェリンに向き直った。

「そう、人それぞれじゃ。じゃが基本的には周りの人、環境によって形成されると思わんか？」

「……。何が言いたい？」

女性が老人の湯のみと少女の湯のみだったもの、それと急須を持ち

部屋の外へと出て行く。

ある程度部屋の気温は上がってきたようだ。

「確かにわしが気づいたのは小学校低学年のときじゃ。それ以来自分を騙して生きてきたようじゃの。申し訳ないことをしたとは思っておるが……。」

そう言い、一息つく。そして改めてエヴァンジェリンに向き直り、次のような言葉を放つ。

「一体、彼女の常識はどこから来たのかの？」

「……は？」

「いや、調べると物心ついたときから彼女の言動は認識障害が効いていない者のそれじゃった。じゃが、彼女はこの麻帆良で育っているんじゃ。」

「成るほど。つまりこう言いたいわけか。麻帆良で育ったなら認識障害が無くても人が車より早く走るのは当たり前。蟠桃が有名にならないのも当たり前だと、そういう常識になるはずだと。」

「うむ、これが外から来た者なら話が判るんじゃが、の。認識障害はどちらかという和外向けの結界じゃし。」

先ほど出て行った女性が新しいお茶をもって部屋へと入ってくる。そして老人とエヴァンジェリンの前に置き、再びエヴァンジェリンの後ろへと控えた。

「おお、すまんの絡繰君。」

「いえ。」

そう一言お礼を言い、老人はお茶を一口飲む。そして湯飲みを両手に抱えたまま次の言葉を放つ。

「どうも腑に落ちんでの。悪いとは思っくんじゃが静観しておった。」
「で？　なぜ今更それを言う？」

「たいした理由ではないよ。そこでじゃエヴァンジェリン、ちょっと彼女を調べー」

「断る。」

「ほっ？」

少女は椅子から立ち上がり、腰に手を当てて湯飲みのお茶を一気に飲み干す。

「私は精神科医でもカウンセラーでも教員でもない、何を当たれ。」

ああ、何かわかったら結果だけ教えてくれ。

そう言い残し、エヴァンジェリンと絡繰は学園長室を後にする。

「ちょ！　せつかくわしが勝ちそうじゃったのに！　おい！」

むう……。行ってしまった。

そうつぶやくと、老人はノロノロと囲碁の道具を片付けだす。

「こうなると誰が適任かのう……。」

ちうのホームページ、更新されなくなっちゃったしのう。

そんな呟きが微かに聞こえてきた。

夢と悪夢と

あ、あれ？ 寝て起きたってことは麻帆良なんだよな？

なんで寮の私の部屋にこいつらがいるんだ？

しかも夢の中で寝たときみてーに右腕をなのはに抱かれて、何故か知らないが左腕にはすずかが抱きついていて・・・

「ふふふ、両手に花ねー千雨。」

しかもアリサがこの状態を携帯で撮っている、と。

ああ、つまり。そういうことが。

「・・・なんだ夢か。」

「ちよっと。夢じゃないわよ？」

いいや、夢で合ってるね。現に私小さいままだし。

一瞬こいつらが夢から出て来たのかと思ってびっくりしたじゃねーか。

おかしいな、いつもだと寝て起きれば麻帆良に戻るんだけど。

まあ夢ならこんなパターンも有るか。

「花以前に、蕾どころかまだ草じゃねーか。」

「あはは、まあそうね。もっとも私は大輪の花になるけど。」

「ラフレシアか。」

「イメージ悪っ！？ 確かに大輪だけど、もっとこう、ハイビスカスとかヒマワリとか無いの！？」

なんかイメージが親父臭くないか？ それはともかく、大輪の花ねえ。

花・・・花・・・何があつたつけ・・・よし。

「ん。お前は光を受けて輝くより、周りに光が無くたって自分で輝くだろ？ 花つてイメージじゃねえな。」

「っ・・・！ な、なによ！？ 褒めたって何もでな」

「ヒカリゴケだな。」

「ちよつと待てー！ー！！？」

あはは、本当に星みたいな奴だな。アリサと話してるとこつちまで明るくなつちまう。

なのはも名前に反して星みたいな奴だ。アリサより無理やり人を明るくする分、恒星つて言つた方が良いかもしれねーけど。

花つていうのはすずかみたいな奴のことを言うんだろ。星ばっかりじゃ目が潰れて見えなくなるからな、この3人はこれでバランスが取れてるんだ、きつと。

あー、でも星と太陽と来るなら、すずかは月か。属性的に。月村だし。

私？ 私は人間さ。

「さて、起きるか？ まだこいつら熟睡してるけど。」

「え？ まだ早いわよ。5時半よ今。」

「・・・本当だ。よく起きたなアリサ。」

「どうでもいいじゃない。私もまた寝るし。」

ま、それもそうか。それじゃ私ももう一眠りするかな。

両腕つかまれてるとちよつと寝にくいんだけど、起こすのもな。別にいいか。

「それじゃ、おやすみー。」

「おやすみ。」

何時から朝飯にするのかな。まあ、どうでもいいか……。

- - お母さん、何であの人は車より早く走れるの？

- - え？ いっぱい走る練習したからじゃない？

- - でもオリンピックの人より速いのは変だよ。

- - この人はオリンピックに出ないから変じゃないのよ。

- - なんて出ないの？

- - みんな出ないからよ。

- - なんてみんな出ないの？

- - 誰も出たことないからよ。

- - なんて誰も出たことないの？

- - 千雨、なにがそんなに不思議なの？

- - なんてお母さんは不思議じゃないの？

- - ここじゃ普通なのよ。千雨は何がわからないのかしら……？

- - ……ごめんなさい、お母さん。

- - うっん、お母さんこそ、ごめんね。わかってあげられなくて

- -

- - 先生、どうしてあの樹は有名じゃないの？

- - ……んー？ 千雨ちゃん、どうしたの？

- - ……何で世界中から見に来る人が来ないの？

- - ……富士山より小さいからかな。あっちを見に行くからね

みんな。

- - - 樹だよ？ 山じゃないよ？

- - - 世界樹でしょ？ この辺では一番大きいけど、普通だよ。

- - - 普通じゃないよ！ すっごく大きいよ！

- - - 他にも大きな木はいっぱいあるんじゃないかな。きっとそっちの方が有名なんだ。

- - - 私調べたもん！ 世界で一番大きいよ！

- - - でも、東京タワーのほうが高いよね？

- - - そうだけど、樹だもん、こっちは！

- - - 千雨ちゃんは何が不思議なの？

- - - っ！・・・何でも、ないです。

- - - わからない事があつたら、何でも先生に聞いてね？

- - - はい。ありがとうございます。- - -

千雨ちゃんは何がそんなに不思議なの？

（違う！ 私以外の皆が変なんだ！）

千雨ちゃんは何が・・・

（皆おかしいよ！）

千雨ちゃん・・・

（私以外の皆が！）

千雨・・・

ちさめ・・・

チサメ・・・

（みんな、が・・・！）

でも

それって

千雨だけが

変なんじゃない？

「・・・ちゃん！ 起きて！ 千雨ちゃん！ 千雨ちゃん！-！」

「千雨！ 起きなさい！！！」

「千雨ちゃん！！！！！」

「うわあああああああ！！？」

「千雨ちゃん！ 大丈夫！？」

「あんた、すごいなされてたわよ！？」

「千雨ちゃん、・・・ぐすっ、うなされてて、起こしても、・・・
っ、起きなくて・・・っ！」

「・・・くそ、このタイミングで、なんつー夢を。

っていうか、そもそもここが夢の中じゃないのかよ、そんなのアリ
かよ・・・。

「あー、泣くななのは、私は大丈夫だから、な？」

「でも、一緒に寝ようって、やな夢みないって、ごめんなさい・・・
！」

「すずかとアリサも、ありがとな、起こしてくれて。」

「千雨ちゃん・・・」

「あんた、どんな夢みたのよ？」

どんな、ね。どんな夢って言われても・・・

「ただの・・・最低な夢さ。」

「千雨ー！ 料理手伝つてー！」
「はい、いまいくー！」

あの後。泣き腫らしたなのは何とか落ち着かせて、その後は特に何事も無く。

いつも通り夕方まで遊んだあと解散になった。

大体なんで夢の中であんな夢を見たんだ？

あんな忌々しい、思い出したくもない過去を夢の中の夢なんて手の込んだ方法で見せるなんて、神様という奴は心底意地が悪いに違いない。

まあ悪魔より神様のほうが多く人を殺している、なんて話もあるくらいだ。そりや意地も悪いだろう。私はキリスト教徒じゃないからどうでもいいが。

「その野菜の皮むいておいてー」
「わかったー」

日本の神様はどうだろう？

・・・だめだな。ひきこもりの神とか、自分より若い女に嫉妬する女神とか、そんなのばかり思い浮かぶ。意地も悪そうだ。

もちろん清廉潔白な神様もいるんだろうけど、私は知らん。

むしろ仏に縋った方がいいのか？ 千手観音とか？

「いたっ!？」

つつ、と、考え事しながら手伝ってたら手を切っちゃった。

夢かどうかを判断するのに痛覚が有るか無いかを判断基準にするのが定番中の定番だけど、ありや嘘だな。超いたい。

「ドジね」。舐めておけばいいわよそのくらい。」

はいはい。まあちょっと血は出たけど、もう止まってるしな。

流れる血をみて思ったのが、ここで死ぬと夢から覚めるのか？ ということ。

もちろん試すことは無いけどな。指切っただけでこんなに痛いんだ、死ぬなんてどれだけ辛いのか想像もつかねー。

それに人は思い込みで死ねるんだ、明晰夢の中で死んだら実際でも死にました。なんてことになりかねん。

とはいってもこのまま何日も夢から覚めないようだったら、何か起きる方法を考えたほうがいいのかな。

このまま起きなかつたら問題が・・・あれ？ 何がある？

「はい、つぎこれを混ぜてね」。手袋するのよ。」

もしこのまま一生夢から覚めなければ。常識的な小学校、中学校だけじゃなく大学までエスケーターで、しかも友達も増えて。

なんの問題もないな、うん。別に覚めなくてもいいか。

・・・なんてな。単なる現実逃避か。いや、この夢がそもそも現実逃避なんだけだよ。

まあハラ減ったら起きるだろ。夢見てる現実の時間経過がさつぱりわからないから、あとどのくらい夢の中か検討もつかないけど。

1日分夢みたところで、実際に寝てたのは5分くらいとかザラだしな、二度寝の時とか。

「焼くのはお母さんがやるわ、ありがとうね。助かった。」

なんて考え事しながら手伝ってたら終わってた、と。

やれやれ、向こうじゃ料理なんてしなかったんだけだな。

今度料理してみるか？　いつ戻るかしらないけどよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0988ba/>

千雨の夢

2012年1月14日22時25分発行